



第48号

執筆者
@ 短信

きむら あきこ

CIDP という難病の日々

前号の短文中に記しましたが、私は、CIDP という難病を患っています。ネットで検索すると、どのような疾患なのかはわかりますが、この難病があることで、私の生活にどのような影響があるかを、少しだけ紹介したいと思います。

この疾患の治療の第一選択となる、免疫グロブリン大量点滴療法という治療が私にはヒットするので、体が動かなくなると、入院して点滴治療を受けます。その後、2、3か月は嘘のように体が軽やかに動くようになりますが、少しずつ治療効果は減退します。

普段は、持久力がなく、常に、手足におもりをつけられているような状態で体を動かしているため、疲労感があります。一方、とても調子が良いと感じることがあり、その時は、外出したり、家の中でも家事など集中して行います。動けることが楽しいのです。けれども、活発に動いていると、急に体が動かなくなり、その後、どっと疲れが押し寄せ寝たきりになってしまいます。このような繰り返しのため、コロナ禍で人に会う機会が少なくなった、というだけでなく、自分自身の体調を信じていくことができなくなり、出歩くことや、人と約束することがほとんどなくなりました。

担当医やリハビリ担当者の話だと、希少難病であり、その症状も一人一人違うようです。私は、発症から 2 年近く経ちま

すが、前述のような不安定さはあるものの、自力での生活はできています。これから、どのような経過をたどるのかはわかりませんが、将来、介護を要する状態になった時には、楽しい介護ロボットに囲まれた生活も楽しいかもしれない、などと考えたりしています。

かぞくのはなし
P311~

原田 希

大好きな祖母が急に天国へ行ってしまい、今回は休載させていただきます。何かあった時はすぐに駆けつけてほしいひとりにしない！大丈夫やから！とずっと約束していたのに、このご時世では危篤になってからしか面会はできず、あつけないお別れでした。それだけに、祖母の人生に想いを巡らせる時間が日に日に増えています。愚痴も言わず数々の苦勞を乗り越え、私たちを育て、孤独とも仲良く、海外旅行にも一人で行き、自分の生き方は決して曲げず、「百歳まで生きる！」と宣言したとおりに有言実行したスーパーおばあちゃん。エナジーいっぱいバトン、ハイっ！次はあんたやで！と手渡された気持ちが湧き上がってきています。コロナ禍で制約されること多々ですが、大事なひとを想う気持ちは制限されたりしない。間に合わないということもない。ただ悲しむよりも、無限大に想うことをパワーにし、歩みを進めます。

おばあちゃんありがとう。

かぞくのはなし
P313~



両角 晴香

書いて伝える、の次に話して伝えるに挑戦しています。2020 年夏に「腎臓生活チャンネル」という YouTube を開設し、旦那様に腎臓を提供したドナーさんと腎移

植にまつわるお話をしています。ニッチな番組ではありますが、もうじきチャンネル登録者数 3000 人を突破しそう。たくさんの視聴者さんに支えられて毎週土曜朝 7 時更新を守り続けています。ついに昨年 12 月、大物ゲストをお招きしました。電撃ネットワークのリーダー南部虎弾さん。2019 年に奥様からの腎移植をされた方です。南部さんは現役の過激パフォーマンスです。70 歳の肉体からあふれだす情熱に勇氣と元気をもらっています。

夫の腎臓と笑う私
P309~

野中 浩一

この原稿を書いている 2 月下旬、島根県松江市では、これまで私の記憶にはないような連日の冷え込み具合。家でこたつに入り温かいカレーライスを食べながら、「暖かいところに行きたいな」と思ったり、とはいえ「朝に車が凍結してしまうこの不便さも、生きてる実感が高まるうえで大事かも」と自分を励ましたりしています。

そんな冷え込む冬、最近では自分が感動からは遠ざかっているなど感じることもあり、もう胸や目頭が熱くなることはないのではと思っていました。ところが、中京テレビの「オモウマイ店」の番組で、おでんをひたすらにサービスしまくるおばあちゃんや、定食を出しながら若者に厳しくも温かい言葉をかけるおばあちゃんを見ているうちに、自然とこみ上げてくるものが。心と身体が一致している仕事ぶりは感動を呼ぶと改めて実感した 2 月です。

「島根の中山間地から Work as Life」
P304~

畑中美穂

遠方に暮らす娘の産後の手伝いに行った。パートナーと 2 人で本当に上手く過ごしている。沐浴の連携プレーなど見事なもの。出る幕なし。うれしいことである。

だから私は、せつせとおさんどんに励む。その間、娘はぐっすり眠る。その気配を感じながら、「親にできることって、子どもが幼い頃も今も、結局、同じなんやなあ」と思う。赤ん坊もよく眠り、私は再び、娘を眠らせるというミッションを得て、冬の静かなキッチンに立っていた。

渡辺修宏

(小幡知史・渡辺修宏・二階堂哲)

2020年度年次会の企画ワークショップからはじまった「対人援助実践をレポートするこの1冊」。おかげさまで2021年度年次会にて、続編を2本実施することができました。関係者、参加者の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

対人援助実践をレポートする
この一冊
P298～

米津達也

山間部に暮らすが、昨年は例年以上にカメムシが多かった。晴天で洗濯物を屋外に干せば、20匹ぐらいはまわりついている。カメムシとびわこ虫が多いシーズンは、寒さが厳しいという。厳しい気候に備えて大量繁殖、種の保存を図っているのだろう。

先日、健康診断を受けた。こちらも例年になく中年太り。厳しい寒さのなか、身を守る本能は虫も人も変わらない。

川下の風景
P291～

高井裕二

連載させていただいて1年経過したのは感慨深いです。これからもよろしく願います。またこの1年、コロナ禍を言い訳にブクブクと太ってしまいました。写真撮影が多い3～4月、食事に気を遣うとともに、少しでも細く見える角度を探しています。

福祉教育への挑戦
P296～

本間 毅

退院支援研究会

今回で本マガジンにおける私の連載は1年を迎えます。これまでの記述は、退院支援研究会が発足するまでの経緯や、支援や援助について私と仲間たちが考えてきたこと、私自身の宿題であった「阿闍世コンプレックス」の論文化など、どちらかと

いうと私たちの「過去」に焦点を当ててきました。これからは、少し趣を変えて現在進行形の問題について論じようと思います。

昨年春にナラティブ関連の出版物が多い遠見書房から刊行した拙著『患者と医療者の退院支援実践ノート』は、発売早々に某通販書店の書評で☆5つ頂戴しました。しかしその後、「部数が伸びません。印刷した分は完売しましょう」と、この度の第13回大会で関係者に配布するよう、出版社からPDF版販促パンフレットを送っていただきましたが、商業的利益相反事項に相当する気がして配布は見合わせました。購入して下さった方の感想は、「同僚の看護師さんや相談員にプレゼントしたが、文章が長くて面倒な言葉が多いので最後まで読んでくれない。プレゼントの二次的効果を感じなかった」が多かったです。三島由起夫は「日本語は本来、なよなよしたもので学術論文より文芸に向いている」と、また和辻哲朗は「ラテン語の桎梏から己を解き放った百余年前のドイツの哲学者を見習い、日常的な日本語をもって哲学を思索するものよ、現れ出でよ」と言いました。

ということで、今回は先日開催された「本学会第13回大会」で私が担当したワークショップ「高齢者のエッセンシャルワーク経口摂取について」の「ほぼ逐語録」を掲載します。(PP原稿を希望される方は、目的を明記し taiinshien@ozzio.jp までご連絡下さい)

「幾度となく会い、
語りあうことの意味」
P276～

土元 哲平

12月に子どもを授かり、新しい生活が始まりました。子どもが産まれて初めて、出産が壮絶なものであること(ただし、誕生の瞬間は本当に感動です)や、子育てが絶え間ない修行であることを身をもって実感できました。なぜ育児休業が必要なのか、里帰り出産というものがあるのか、おむつを大量買いするのか、ベビールームがあるのか…など、様々な謎が解けました(笑)1月に迎えた自分の誕生日も、例年とは違ったものを感じました。人の誕生の大切さと有難さを感じています。

キャリアと文化の心理学
P267～

玉村 文

新型コロナウイルス感染症の流行で、濃厚接触者となった長男とともに7日間の自宅待機を経験しました。その記憶を記録にも残しておきたいと思って書き始めたものの、なんだか筆が進みません。なぜだろうと考えてみたところ、自宅待機では特別な何かをしたわけではなく、子どもとたんと生活を、代わり映えのない日常を送った7日間だったからです。

一方で、自己選択での自宅待機ではないからこそ、日常生活とはまた違う感情や気付きがありました。前号までのように書きたいことを書いて執筆を楽しむのではなく、記録を残すことを目的に書きました。そうすることで、日々に埋もれてしまいそうな非日常であり日常を、特別な体験として意味づけようと試みました。



応援 母ちゃん!
P259～

川畑 隆

神戸で仲間と一緒に「新版K式発達検査を用いた発達相談」のワークショップを25年以上続けています。しばらくコロナで中断していましたが、1月に久しぶりに再開しました。保護者への助言のロールプレイではフェイスシールドを着けて、活発にやりとりができました。マスク越しで顔が見えないのがもひとつですが仕方ありません。でもやっぱりライブはいいです。

京都国際社会福祉センターでも「新版K式発達検査を用いた事例の検討会」が対面であって、2日間で4ケースを検討しました。1ケースにつき3時間くらいをあてるわけですからかなり中身が濃く、充実した時間を過ごせました。

みんなで「いま、ここで」じっくりと考えて話し合えるこうした機会を、早く日常的に取り戻したいものです。

昨年12月に、「川畑隆『要保護児童対策地域協議会における子ども家庭の理解

と支援一民生委員・児童委員、自治体職員のみなさんに伝えたいこと』2021 明石書店」が発行されました。

かけだ詩
P254～

工藤 芳幸

昨年、義父が脳梗塞を発症し、左片麻痺の後遺症が残りました。しばらく回復期リハビリテーション病院で入院生活を送っていました。今回、初めて家族の立場でMSWとやりとりをし、カンファレンスに出席する機会がありました。出席と言っても、地方の遠隔地にある病院のために大阪から越境することは認められず、リモート参加でした。

家族の視点で話を聞いていると、専門職のことばはとても難しく、展開も早いと思いました。病院では日常的に使っている言葉でも実は専門用語というものは多々あります。これはなかなか気づかないものです。

私自身、日頃の臨床で子どもや保護者に説明することばに意図せず専門用語が忍び込んでないか、改めて振り返りました。

退院にあたってケアマネージャーや福祉用具の業者さんなどリモートですが話す機会があり、家庭訪問にもリモートで同行させてもらいました。無事に退院して自宅に帰ることができましたが、コロナの影響でそれまでの間に外泊をすることもできず、ベッドやトイレの設置、住宅改修のことなど本人の思いと現実的な問題との間で、十分に時間をかけて進めることは難しい状況でした。何とかギリギリ間に合っ、介護保険サービスを使いながらの新しい生活が始まりましたが、いわゆる「老老介護」です。

我が家は核家族で大阪、実家はいずれも遠方。話し合いは何とかリモートでできて、その恩恵を受けたわけですが、やはり直接現場に出向ける状況になって欲しいと願うばかりです。

みちくさ言語療法
P 252～

高名祐美

学童に通ってくる子どもたちから「ツバメ」という曲を教えてもらった。この曲は、NHKの「あお きいろ」という番組のテーマ

ソング。実際の番組を見たことがない私は、子供たちにリクエストされてパソコンで調べてみた。『「あお」と「きいろ」はちがう色だけど、ふたつ重なると同じみどりになる。いろとりどりの命が重なり、ひびきあうことで、ともによるこび、ともにたすけあい、ともに生きていく。そんな「共生マインド」をはぐんでいく番組』と紹介されていた。その番組のテーマソングが「ツバメ」。「YOASOBI とつくる未来のうた」企画のグランプリ作品、「小さなツバメの大きな夢」をもとに作られた楽曲だった。

ダンスの振り付けがついていて、学童の子どもたちは、『6年生を送る会』で踊ることになっている。それで学童でも練習したいとリクエストされたのだった。一度聴いて、歌詞がとても素敵なのに感動した。そして私も大好きな曲になった。毎日子どもたちと聴いている。ぜひ、みなさんも「ツバメ」を聴いてみてください。歌詞がぐっと心に響きます。

詞・曲・編 Ayase（歌詞の一部抜粋）

悲しい気持ちに飲み込まれて
心が黒く染まりかけても
許すことで認めることで
僕らは繋がりは合える

僕らに今できること
それだけで全てが変わらなくて
誰かの一日にほら
少しだけ鮮やかな彩りを
輝く宝石だとか
金箔ではないけれど
こんな風に世界中が
ささやかな愛で溢れたなら
何かはほら変わるはずさ
同じ空の下いつかきっと
それが小さな僕の大きな夢

ふりーすくーるでのSW実践を考える
P249～

岡田隆介

ソロキャンプやヒトリカラオケをまねた「蜜にならず Zoom も使わぬ仮想事例検討会」。これは、つまるところ過疎事例検討会だ。

エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P43～

一宮 茂子

【脳トレはほぼ無意味】

ある新聞記事に書かれていました。70代ともなると、世代全体の10%が認知症になり、残りの9割は頭がクリアだそうです。近年、「脳トレ（脳カトレーニング）」と呼ばれるトレーニングメソッドが、脳に刺激を与え、ボケ防止に役立つということでブームになっています。「頭を使っている人はボケにくい」というのは一面の真理だそうですが、もっとも効果が高いトレーニングは、人との会話だそうです。他人とのおしゃべりは、自分の話したいことに対して相手から反応が返ってきます。強制的に頭を働かせなくてはいけない局面が増えるため効果があるとのこと。それなら楽しみながらできますので早速友人たちに情報提供します。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P234～

松岡 園子

私は小学生のころ日記を書いており、そこに「市場の八百屋さんで働きたい」と自分の夢を綴っていました。イラスト付きで鮮明に描いていた夢です。テレビで活気のある市場の様子を見て、そこに行ってみたく強く願っていました。



今、不思議なご縁があって、中央市場の仕事に関わることがあります。昔の方がもっと活気あったよと皆さん話されますが、小学生時代の自分の夢を叶えられ、私は満足しているのです。

最近、そこで廃棄される食材があまりにも多すぎることに驚き、フードロスに関心を持ち始めました。学校の休校、飲食店の営業自粛、イベント中止などで準備していた食材が余ってしまいますし、生ものだから消費者のもとへ届けるのも期限付きです。

フードロスを削減する通販サイトも増え

てきており、私も利用するようにしています。ご関心のある方は「WakeAi(ワケアイ)」「うまいもんドットコム」「ロスゼロ」「KURADASHI」などのサイトを覗いてみてください。

**統合失調症を患う母とともに
生きる子ども**
P231～

杉江 太朗

児童福祉の行政機関で働く杉江と言います。この短文を書いている、今現在、新型コロナウイルスの影響で在宅を余儀なくされています。私や身の回りの人が感染したというわけではなく、感染した人の濃厚接触に当たるかもしれない人の接触者という立場で、近いような遠いような話なのではありますが、一応、感染の可能性がゼロではないということで、数日間、在宅になりました。最初は、在宅ワークという形で、記録を書いたり、電話したりと仕事モードでしたが、当然集中が続くわけもなく、午後からは休みに切り替えて、せっかくなので好きなことをしています。カフェドゥスギエは、店主がいなくても営業中です。稼働しているかはわかりませんが、在庫過多は解消され、強制的に届けられるという不安からも脱却が出来たので、新装開店はひとまず成功と言えるでしょう。そして、今まで貯めていたポイントを還元したところ、若干ではありますが赤字の解消に繋がっています。サブスクというサービスが流行っているようですが、私自身は向いていないと思っています。安価な値段であっても固定化されてしまうことで、「見なければいけない」という強迫に駆られてしまいます。必要なときに、必要な分だけ、過剰に手に入れないという方法が私には向いていることに気付かされました。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P227～

浅田 英輔

もう令和3年度が終わってしまう。児相を離れて丸々7年が経つ。直接的な臨床場面からは遠のいてしまっているが、障害福祉や高齢者福祉、地域づくりに関連する他の仕事をすることで視野が広がった感覚はある。今のほうがよい面接ができる気がしているが、ウデは落ちているだろ

うなあ。「相手の言動への敏感さ」はよくなっていると思うが「そこで一番適切な言葉」の感覚が鈍っている気がする。知らんけど。



臨床のきれはし
P131～

三浦 恵子

コロナ第六派の最中に原稿を書いています。この感染症におびえる心理に、私は、この新しい感染症そのものに対する恐れよりも、それに罹患することで、何らかの差別を受けるのではないか、自分の関係する集団に「迷惑をかけたくない」という気持ちがあることを強く感じています。こうした日本人の心性があるがゆえに、欧米の一部で行われた都市封鎖などの強い措置が馴染まないという説もあります。

「(感染者がいない地域や学校・職場で)一人目の感染者になりたくない」「自分が原因で他の人を感染させたら申し訳ない」という気持ちの底にも、周囲への慮りのほかに、そうなった時に自分が排除されるのではないかという恐れが潜んでいると私は思います。そうした恐れから、感染時の申告等が遅れ、より混乱を招いた事態があることも友人から聞きました。

あれだけの感染者数ですし、いくら家庭・職場で感染対策を徹底しても、ぎちぎちの満員電車等に揺られていれば、これはどこで感染してもおかしくないとも感じています

。もし自分が感染した時に、それを正直に申告し安心して療養に入ることができるかどうかは、自分自身が所属する集団や社会への信頼感と関係しているのではないかと考えます。

こうしたことを書いていると、あるエピソードを思い出しました。私は刑事政策の仕事に携わって長いですが、奉職した当時は女性が現在ほど多くなかったこともあつ

て、「なぜ、この仕事を」と聞かれることも多くありました。着任したポストが「女性初」と呼ばれたことも多くありました。

ただ、40代で遅い結婚をし、親族方に挨拶に回った際(当方は私も配偶者も両親の介護をしていたため、式はスーツ姿でそれぞれの親の車椅子を押すというスタイルで、その後小さな食事会をしただけだったため)この時、比較的年齢の近い方(同性)から「犯罪をした人を相手にする仕事なんて、怖くないの」「私なんかとてもできないわ～」「だって家庭との両立だって大変そう」と面と向かって言われたことがあります。決して意地悪や悪意は感じないのですが、自分の経験したこと以外は理解できないということをそのまま口に出されることで、相手がどう思うかという点に慮りができないのかしらと感じました。私の視界の隅にはその方の御主人に当たる方が目顔で詫びておられるのを感じながら、私は笑顔で「せっかく専門知識を学んだのですから、それを活かして社会に還元したいという思いは学生時代からずっとありました。なにより、世の中には誰かがやらなければならない仕事というものはたくさんありますから」「●●さんの生活も、そうした人々の仕事で支えられているわけですよね。おうちの中でいらっしやるとなかなか見えづらいですんですね。こうした言葉を平成20年代も半ばになって耳にするとはいけませんでした。なんというか、かえて新鮮ですね。

私は学生時代も今も、こうしたことをおっしゃる女性は周りにいませんでした。でも、似たもの同士より却って違う価値観などを学び合えるかもしれないですね。どうか教示方お願いしますね。」

と対応しました。私としては極めて穏当な答えをしたつもりですが、以後彼女からはなぜか非常に怖がられています。

自分の生活は見えない多くの方の働きによって支えられているということが想像できない彼女は、今このコロナ禍をどう過ごしているのかしらとふと思いました。

更生保護官署職員
(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

**現代社会を『関係性』という
観点から考える**
P215～

黒田 長宏

私の中学も高校も修学旅行が偶然にもどちらも京都だった。高校の頃のはたしか、安全地帯が『恋の予感』を歌っていた頃だと思ふ。経緯は省くが、京都に本部を置く短歌結社の、現代短歌の歴史に必ず含まれる河野裕子氏のスカウトで、今は辞めてしまったが、そこに参加していたことがある。そして現在。CSで全30作を録画した、京都そのものではないが、片平なぎさと船越英一郎のコンビの、『小京都ミステリー』の5作までを観た。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚
P199~

尾上明代

しばらく前、ある研究の一環として、中学生に芸術を通して歴史を学んでもらうためのワークショップを実施した。テーマは、紆余曲折を経て日系移民、それも 1800年代後半から盛んになったハワイへの移民ということになった。



ハワイ移民と聞いて映画「ピクチャーブライド」を思い浮かべる方も多いと思うが、あのような先人の命がけの苦労や力強さなどを「体験」してもらうことにした。時間や回数、対象者の状況などさまざまなが限られた条件の中で、いかに目的を果たすかというのは、どのようなドラマワークショップやドラマセラピーセッションの計画においても長年実践してきたことだが、ここまで難しかったのは初めてである。

1回だけ(3時間)の授業で、演じることに慣れてない、しかもそもそも「ドラマ」で演じることなど友だちを意識して、恥ずか

しがらんであろう年代の子どもたちに、そのような自意識をなくして「役」をリアルに「体験」してもらうことを実現させるのは、とてもチャレンジングだった。

移民の方の苦労を体感してもらうことにフォーカスを当てれば、当然リアル感が強すぎて危険になる。子どもたちの心身の安全を確保することは当たり前のことであるが、楽しいだけのワークショップであれば意味がない。まったく矛盾している目的を果たすべく熟考した。その工夫には、これまでで一番苦労したと言っても過言ではない。

私が信頼できる関係性をもつ他の研究者たちが、演技その他で協力して下さったことにも多に助けられ、結果として体験的理解と安全を両立させることができたと思ふ。ドラマだけでなく、歌やフラダンスなども使って子どもたちにメッセージを伝えることができた。これからもう少しじっくり考察を重ねて何かのかたちで発表したい。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P102~

松村奈奈子

いやー、今年は雪がスゴイですね。私、「雪だるま」が好きなんです。もちろん京都市内の中心部は、ふつても薄っすらと積もるだけで、すぐ融けてしまいます。しかし、仕事でいった近畿北部の公園や駐車場の片隅で、今年はリッチな「雪だるま」をたくさん見かけました。目が人參だったりジャガイモだったり、ひとつひとつ個性があるので「どんな人が作ったんだろ」と想像しながら、立ち止まって見てしまいます。結構、大人が凝って作っている姿も見かけます。わかるなーその気持ち、私も時間があれば作りたいです。ただ今年は、そんな雪を見ながら地元の人が口をそろえて嘆きます「もう雪は勘弁してほしいわ！」と。

精神科医の思うこと
P168~

柳 たかを

あるネット対談と 6G 運用ニュースからの妄想話

docomo が 6G(5G の次)の実証実験に成功したとのニュース、2030 年頃の運用

を目指すらしい。プロのピアニストの技術情報を人の脳に入れたチップが受信し、この 6G を使えば特別な練習や訓練をしなくても、自分の脳神経を通じて指がプロ演奏家のように勝手になめらかに動いて弾くことが可能になるだろうという。

素晴らしいと喜ぶよりそんな未来はどうにもゾッとするのが、、YouTube 動画で知った A 信介氏と M 愛氏の対談ライブ。

話題は古代に始まった歌会の話、古代はまず今日のようなエンジン音がなかった。音といえば水の流れる音、虫の音、鳥のはばたく音、風に木の葉がこすれる音、そんな静まりの中で歌会の第一声が発せられる。歌には魂の純粋さが問われ、そこが現代に一番忘れられている部分。

歌で評価される者が一番尊重された。なぜなら歌がいちばん魂を表現できるものだからだ。静寂の集まりの中、第一声を発する役は魂が純粋な者が選ばれて務めた。

現代社会は騒音があふれていて、伝えるためにはさらに大きく怒鳴らないといけない。「魂が伝わるためには真の静寂が必要」だというのがすごく腑に落ちた。

感動とは何かと考えてしまう。一流プロの技は魂をよく伝えるために駆使されてこそ輝く、技は魂より目立つべきではない。

人間は一人一人が魂の存在であり、誰もが感動を与えられるかけがえのない存在。私の魂はあなたの魂より優れてるなんてこともない。

なるほど、、人間とロボットの違いは魂を持っているかないか、技や知識では人間は AI の足下にも及ばなくなるだろう。魂の価値はますます高まっていくだろう。古代の歌会に参加した人びとは魂こそ人の価値だと知っていただろうという。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ
P173~

藤 信子

我が家で、この 2 カ月話題になっている「月刊住職」という雑誌がある。家族の一人が新聞の広告欄を見て、「面白そうな記事載せている」と言い出したので、買ってみた。私は仏教徒ではないので、却ってためらいなく買おうと思った。初めて聞く名前の雑誌で、本屋で聞いても、うちでは扱

っていないと言われたので、取り寄せた。記事の一つが、香典辞退が増えていること、これは家族葬が多くなったこととも関連している、ということらしい。以前の地域社会がなくなり、自己責任ということになり、以前の様に共同体で吊うということが無くなってきたからだという論もある。この記事を読むと、現代の社会が具体的に見えてくる。ビビッドで面白いので、1月、2月と買っている。

対人援助学との出会い(3)

P40~

団遊

2月24日木曜日の夜に、編集委員の大谷さんと千葉さんに誘ってもらい、**対マガトークライブ**を開いた。一人でしゃべるよりも、色々聞いてもらう方が心地良いのでインタビュー形式でお願いした。打合せは何もせず、その場で聞かれたことを考えて話す。その方が初出の話題になりやすく、ライブ感が出ると思ったのだ。最近、頼まれ講演も、テーマと話してほしいことが明確にあって依頼されてきた場合を除き、同様の形式を打診することにしている。

いつも通り、やり終えてみると、ちゃんと喋れたような・片手落ちのような、思ってもいないことが伝わってしまったような・それはそれで面白かったような、気持ち良さは程遠い、なんか「もうちょっとできた気がする」感に苛まれる。自分としては、あらかじめレジュメを用意して整理したことを話した方が、やり切った感が高まることは知っているのだが、それだと自分の中に新しい発見が芽生えにくいことも知っている。企画の中に、不確実性をどの程度取り入れるかは、匙加減だ。大味過ぎると参加者に失礼だし、レシピ通りだと、こちらがつまらない。

予定調和で進む話ではないので、無理を言って録音してもらい、それを自分で聞き直したりもする。加えて今回は、その内容をもとに、語り足りなかったことや上手く言えていないことを文章にして採録することにした。それを第49号の原稿にしようと思う。というわけで、48号は1号休載します。トークライブに参加くださった皆さま、ありがとうございました。

休載

村本邦子

最終年のプロジェクトは、いくらかの制限はあったものの、院生たちを現地に連れていくことができた。最終のシンポジウムも何とか無事終わった。現在は、プロジェクトまとめの出版準備をしているところである。新年度からは、規模を縮小し、福島を中心にささやかながら活動を継続するつもりである。

コロナの収束はなかなか見えず、戦争まで始まってしまった。おとし、チェルノブイリを訪ねたおり、キエフとオデッサに行った。あの頃もクリミア危機やユーロマイダン革命の傷跡が生々しかったが、こんなことになってしまうなんて。出会った人々の顔を思い浮かべてはどうしているのか心配している。諍いや戦争は人間の性なのだろうか。一刻も早く武器を捨て、話し合いのテーブルに着いてほしい。こんなことが日常になってしまうのは嫌だ。

周辺からの記憶 一東日本大震災

家族応援プロジェクト

P150~

國友万裕

この原稿が出る頃には58歳になっています。2月は誕生日なので、少しはお金を派手に使って楽しくやろうと思っていたのですが、オミクロンがまだ終わっていないため、早々友達と飲食というわけにもいきません。

コロナに悩まされ続けて2年間。この2年間はそれまで生きてきた人生とは色合いが違っていました。「戦時下」のような雰囲気。実際に戦争が起きたりしたら、こういう状況になるのかとも思ったものでした。終わるようで、終わらない、長い戦い。第一次大戦や第二次大戦の頃と比べて、実際の戦争で死ぬ人は減っているけれど、自殺する人の数は多いので、悲しい死に方をする人自体は減っていないと聞いています。今や心の戦争の時代ですよ。

あと2年で還暦ですが、今は還暦の後が長い。人生百年時代です。人によっては還暦から後が人生のベストの時期だという人もいます。確かに、クリント・イーストウッド、山田洋次など90歳で一線で活躍している人もいます。

社会的に成功していなくても、充実した老年期を送っている人は大勢いるでしょう。これから僕にもそういう人生が待っていればいいんだけど、これも運命なんですよ。そうなることを願いつつ、1日一生という気持ちで生きていきたいと思います。

男は痛い！

P120~

古川秀明

コロナの影響で足掛け2年間講演会&ライブが中断しています。その分、日々のカウンセリングや自己研鑽に励んでいます。まだまだ学ぶべきことがたくさんあることに気付きました。



それでもやっぱり講演&ライブを再開したいという思いは強くありますが…。皆さまどうか安全に。

講演会&ライブな日々

P138~

西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

この原稿を出したら、12年まるまる、48回、この連載を続けさせていただいたことになるのです。我ながら信じられないなあ！と思います。「福祉系専門職養成」なんて、いつてしまえば決まり決まったことを毎年繰り返すものなのだから、そんなに書くネタがないように思います。しかし、福祉は「社会」福祉ですから、社会の移り変わりにあわせて、養成のあり方も変化するのです。だから、テーマが同じだとしても、時代が変われば書く視点が変わり、また違うお話が書けるのです。…ということも、12年続けてきたからこそ感じることだなあと、思います。この連載をしていなければ、社会福祉士や保育士といった「国家資格」なんてものは、それこそ厳密で、固定化され

たものだというイメージしかなかったと思います。おかげさまで、専門職養成というのは時代に合わせてガンガン変化するものだと実感しています。

確かに毎回ネタが出てくるまでが大変ではあるのですが、ウンウン考えているときよりも、何気ない時にふっとテーマが降ってきます。しかしずっとウンウン考えていないとその「何気ない時」はやってこないという不思議。3か月に一度、ウンウン唸らせていただいて、私は幸せです。

福祉系対人援助職養成の

現場から

P92～

坂口伊都

この4月から、児童養護施設で働くことになりました。今、主で務めているNPO法人の方から運営上、来年度は働く日数を減らして欲しいと告げられ、さてどうしようかな。娘の学費と下宿代とまだまだお金が要る息です。健康保険が国保になるのは辛い。これからの人生どう過ごすべきか、夫の扶養家族に入ってみる？里親をする？等いろいろな考えが駆け巡りました。家族に相談をすると、何かしないといられない性分なのだから、今までの人脈で何かあるのではないかと夫に言われました。

さて、この年齢で何ができるのか、そろそろ社会に少しでも還元していけることは何かと考えたら、今なら児童養護施設で働けるのでは？と頭をよぎりました。夫が特別養護老人ホームの職員なので、施設職員は選択肢になかったのですが、娘が成人し、今までの経験が使える、体力的にもギリギリ、今を逃すともうできないなと思い、施設職員の知人に尋ねてみると、そこからは、とんとん拍子で決まりました。体力面での不安は大きいですが、養育里親をしていた時と施設職員をしている時、何を私自身が感じるのかなと思っています。この3月21日で53歳です。皆さん、私にエールください!!

家族と家族幻想

P145～

河岸由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

【体調】私は「元気」が衣を着て歩いているような人間である。いくつか持病はあるが、病気や怪我で仕事を休んだことは一度もない。そんな私だが、ここところ、ずっと湿疹と右肩の痛みに悩まされている。右肩は年末の大掃除の時に、高いところの掃除をしていて、不安定な踏み台から落ち、右ひじと右肩を打ったことが原因だ。



痛かったが骨は折れていなさそうだったので、とにかく固まらないように動かしていた。動くには動くがやはり少し制限がある。1か月余りたってからやっと整形外科を受診できた。診断結果は軽い五十肩みたいなものとのこと。リハビリに通うか自分で頑張って動かすしかないと言われ、ロキソニンと胃薬をたくさんもらって帰った。痛みを我慢するのは良いのだが、睡眠の邪魔になるのが困る。加えて、昨年9月ごろから出始めた湿疹が全身に広がり、かゆくてかゆくて、これまた睡眠を妨げる。結節性痒疹とかいうものらしく、原因不明。紫外線治療もあると言われたが、そんなに何度も病院に通える時間はないので、最強とか書いてある塗り薬(ステロイドの混合剤)をべたべた塗りたい。あとは飲み薬で頑張る。しんどいのは睡眠不足である。私の元気の素は「快眠」なので、睡眠が良くないと体調に影響が出ているように感じる。相談業務で自分の体調はとても大事だ。クライアントの話を聴く際は、何とか集中できているが、記録を書いたり、講義や研修の資料作ったりなどに集中できない。少しでも気を抜くと、こっくりこっくりしてしまう。早く治ってほしい。

ああ、相談業務

P97～

先人の知恵から

P190～

岡崎正明

誰かと誰か。誰かと何かをつなぐのが好きである。あとで「アレとアレをつなげたのって、実は僕なんだよね～」と、1人噛みしめてほくそ笑む…。そんな気持ち悪い趣味がある。友人にやたら飲食店や気に入った映画を勧めたがる習性も、たぶんそれとつながっているような気がする。

仕事でもその特性はフル活用しているが、最近は本来業務外の研修や講演の企画に、頼まれて携わることもチョコチョコできた。いよいよ特性が加速してきたのかもしれない。

おかげで勝手に日々が忙しくなるという自爆現象も体験しているが、貴重なお話やご縁を頂けることも多く。最近では、尊敬しているゆるスポーツ協会代表理事の澤田智洋さんに知り合う機会を得て、地元の自立支援協議会で講演してもらうこともできた。また近々ヤングケアラー関係の方を、職場の研修や別部署へつなげるお手伝いも予定している。樹木希林も言っていたけど、人生面白がれたもん勝ちだと思うので、当面この趣味はやめられそうもない。

役場の対人援助論

P127～

大谷多加志

しばらくゆっくり本を読む機会を作れていなかったのですが、久しぶりに読み始めるとやっぱり面白く、どんどん食指が動いてしまいます。

最近読んだのは「ブルシット・ジョブの謎 クソどうでもいい仕事はなぜ増えるのか」(酒井隆史著 講談社現代新書)と、「人新世の資本論」(斎藤幸平著 集英社新書)の2冊で、仕事やお金にまつわる本に手が伸びたのは、これから社会に出ていく学生さんを送り出す職場に身を置くことになったことと無関係ではないと思います。

資本主義や右肩上がりの経済という幻想が崩れるのをどうにか防ぐ(というかつケを先送りする)ために世の中にあふれる不条理や矛盾、不合理、葛藤。その影響を最も強く受けているのが若年層であり、それが自死自殺やひきこもり、ヤングケアラーなど、様々な形で表面化してきているのだと感じます。やりきれない腹立たしさ

を感じたものの、現状自分もこの社会システムの一部を形成しているわけですから、これは自身の問題として問い返されてきます。

このような流れで、昨日の団遊さんのトークライブに参加できたのは本当にありがたいめぐり合わせでした。「成長」が自分の中で再定義された気がします。ということは「育てる」ということの定義も、また変わります。学ぶことで問いは増えていきますが、やっぱり面白い。そう思わせてくれる環境があることが、本当に感謝です。

発達検査と対人援助学 P134～

馬渡徳子

三月は、お別れの季節でもある。三年間研究室を共にした留学生達が、いよいよ卒業し、母国へ帰国したり、日本での就職をされる。彼らは、丁度、コロナ禍の前年に母国の大学を卒業し、日本に研究生として一年間学び、コロナ禍を迎えた年に、大学院生となった。

研究デザインを実現可能な方法に変更する必然性に、どうしても納得がいなくて、指導教官や研究仲間との議論後に、どうにも気持ちの整理がつかなくて、研究室に入室後に涙があふれ、ただ黙ってそっと抱きしめ合う場面も、何度かあった。お互いに、苦悩しながらも前に進もうと踏ん張る姿に、彼らの親世代である自分は、逆に何度も励まされた。

二月中旬に、彼らの最終報告会があり、その直前が、バレンタインデーだった。

患者会の役員さんで、コロナ禍の二年間に、四回も、私につながる留学生さんにと、消毒シート、マスクやお米、お菓子やりんごを寄付下さった方から、「こころばかり」「日本にまた来てね」「がんばり賞」「努力賞」等と書かれたチョコレートを送付頂いた。

最終報告会は、残念ながら全ては対面とはならなかったが、研究室でご苦労さまと労い合う機会を持てたので、その際に「宝達志水町のサンタさんから、卒業祝が届いたよ」と手渡した。すると、翌週に、「返礼の中国のお菓子」を賜り、そこには連名で「お米とリンゴのサンタさんへ。私たちも、あなたのようなお年寄りになりたい。お元気で。」とカードが添えてあった。

私も、宝達志水町のサンタさんのように、「小粋なギフト」ができる様に、歳を重ねたいと思う。

転機を迎えられる皆さん、ごきげんよう!

馬渡の眼 P171～

団士郎

25年非常勤で週一勤務していた京都市職員相談室が、財政危機で閉室になる。アウトソーシングされるそうだ。

最後の一ヶ月余は久々に会いに来てくれた人との予後面談やカルテのシュレツダー作業など、通常とはまったく違った日々になった。

組織に属すると定年退職や会社倒産やリストラなど、自分の意思とは無関係に運命が変わるのはあることだ。

対人援助学マガジン創刊以来、ずっと編集長に居座って、四十八冊目を刊行し、十二年目が満了する。切りのいい数字な気もするが、辞めなければならない理由がないので、引き続きやる予定だ。

「自分のすることを他人に決められているのは奴隷だ」という言い方があって、四十代に知ったとき、目から鱗だった。そして奴隷になって愚痴を言う人生は選択したくないと思った。

だから閉室に伴って、心理臨床業務の終了！なんて、こんな事がまだ私の人生に残っていたかと気付かされた。いつまでもなんとなく、ダラダラ続けていくような気が無意識にしていたらしい。

基本、私のすることも、しないことも、それを決める権利は私に属している。そう思ってきたが、そうはいかないこともあるのだな。

配偶者を亡くして一年日記(3) P56～

鶴谷 主一

2022年に入ってからコロナ・オミクロン株の感染が広がり、それまでは「子どもには感染しにくい」とどこか安心していただけがあった幼児教育界も、バタバタと感染、休園、学級閉鎖が相次いでいる。感染者が出てても保育は止めないこと！とされていた保育園でも休園する。

市(行政)からは詳しい情報が出てこな

いので、沼津市の協会では Chatwork を通じて園長同士が発生状況を報告し合っているが、頻りに報告が来るのでだんだん慣れっこになってきている感もあり、ある意味「日常」になってきた。

そのため以前ほど“犯人”捜しが行われたりせずに、誹謗中傷の重さがなくなって精神的には良い面もあると感じるこの頃。感染予防は相変わらず重荷であることは変わりませんが…。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ [haramachi.k](https://www.instagram.com/haramachi.k)

ツイッター [haramachikinder](https://twitter.com/haramachikinder)

幼稚園の現場から

P84～

水野スウ



前々号に続いて、2度目の連載お休み届けを出します。

2月、いつもの銭湯でゆっくり温まり、湯船から出て数歩あるいたところでふわあつとなつて倒れて、気づいたら救急隊員さんが裸の私を毛布で包んで担架に乗せるところでした。初の救急車で緊急搬送。検査して脳からの出血なし、心臓にも異常なし。でも倒れたはずみに顔を打って(頭でなくてよかった!)、目の下のくぼみの骨が2本と下顎のちようつがいの骨が折れていたことがわかって、着の身着のまま入院。骨は折れたものの幸いずれていないので、手術はせず自然にくつつくの待つことに。

そう聞いて、入院中につらつら考えた、私のリカバリーに向けての養生プラン。その① 食べる時はおちょぼ口、話す時はもごもごぼそぼそと宣言。その②「紅茶の時間」は約ひと月おやすみします宣言。その③ ちから強い味方チーム、以前から定期的に施術してもらっている、親しい2人の友人鍼灸師さんとこにすぐにも通うこと。

大口開けたり、歌ったり、硬いもの噛んだりしないで、とドクターに言われたけど、

退院後も痛くて口が開かず、言われなくてもそうになりました。おかゆからはじめて、二週間あまりたって普通のごはんが小口で食べられるようになった時のうれしさよ。

毎週の「紅茶」も、コロナのこともあって来る人は少ないので開けようと思えば開けられるけど、会えたらうれしくて、わーきゃーはしゃいでしまいそうだし、ガハイと大口開けて笑うのを我慢することの方が苦しいので、思いきってのお休み宣言。紅茶39年目にしてはじめての A long vacation をとるぞ！そう決めたとたん、頭のなかで大瀧詠一の「君は天然色」が鳴り響きました。

友人鍼灸師さんとこにも早速通っています。鍼灸は骨融合を促進し、折れた骨の周りのダメージをうけた細胞も元気にするちからがあるそう。最初の施術で声が出るようになり、2回目の施術で硬くこわばっていたほっぺに柔らかかみもどって、なつかしい私の笑顔ともようやく再会。鍼灸は本人の持っている治る力を引き出す手伝いをするもの、と2人とも言うので、味方チーム3人の中には私も含まれています。

こうして日ごとに回復していきながらも、パソコンと長時間向き合っていると頭が重くなり疲れやすいので、今回は無理せず、マガジン原稿をお休みすることにした次第です。

退院してしばらくは刻々と変化していく顔の形やカッパ色した自分のほっぺが気になっていたけど、今はもうだいぶ、いつもの私の顔。それにしても、銭湯で倒れたことを facebook に書いたら、似たような経験あるある、の人が思いのほか多いことにびっくりです。今回の私のけがの原因はひとえに、よくないお風呂の入りにあり。入る前、少なくとも 200ml は水分をとること、湯船からいきなり立ち上がらずに、半身をお湯から出すなり、ふちに腰掛けるなりして体を冷やしてから立ってくださいね、と入院先のドクターに教わりました。どちらも私、してなかったです！

みなさんもお風呂ではどうぞお気をつけてあったまってくださいね。まだまだ寒い日は続きそうなので。

きもちは言葉をさがしている
休載

脇野 千恵

コロナ禍にも慣れてしまったなと思うこ

ごろ。それに加えて遠い国では、新たな危機に見舞われている。個人にはすぐに影響はしないかもしれないが、じわじわと私たちの生活にも変化が出てくるだろう。しかし、日常の生活は淡々とこなすしかない。

4月から、また今の職場で引き続き仕事をするようになった。一方で、セカンドライフとしての仕事も忙しい。長年、時間をかけ積み重ねてきた研究と実践。求められれば、それに応える。もっと社会に役立つ場面を増やしていきたいと思う。

こころ日記「ぼちぼち」part II P247～

中村正

戦争！アメリカのアフガニスタン侵攻（2001年）の際、サンフランシスコで非行・犯罪の調査に出かけたことがある。脱暴力を試みる青少年の立ち直り施設でヒアリングをした。その心理士が悩ましく話をしてくれた。「こうした地道な非行や暴力に関わる臨床現場では脱暴力を説いています。しかし社会全体では国を挙げて戦争を進めています。こうした時に脱暴力の現場はささくれ立つのです。当事者たちが揺れるのです。」とため息とともに話をしてくれた。空しさをかみしめているようでもあった。世界はつながりあっていて、同じような気持ちになる現場を私ももっている。I Stand with Ukraine ! Stop War !と記したウクライナ国旗入りの T シャツを着て Zoom 会議にでることしかできない。

臨床社会学の方法 P22～

千葉晃央

対人援助学会 第13回大会に参加しました。対人援助学という領域自体を拓いてきた意味をあらためて考える機会になりました。本間先生は対人援助学会ならではの領域を超えた広くて深い理解やその協働の実績を見せてくださって知ることの喜びを感じさせていただきました。高橋先生のインターセクショナリティをテーマにした発信も、予定調和に落とし込まずに見せてくださる率直さがとても大切な姿勢だと思いました。いろんな世代がこうして発信、交わる機会があるこの学会はやはり

楽しい経験でした。ポスター発表も自分が出身のフィールドにおける取り組みも多く、興味深く触れることができました。対人援助学会の独自性ともいえる、研究と現場を結びという使命があるように思っています。そのおもしろさが伝わってくる内容ばかりでした。こうした学際的で、しかも継続的に存在する舞台があること、しかも13年も…！という意義を感じた大会2デイズ。数年前からネット利用を漸次進めてきた流れがあったことも、こうして継続できているポイントのように思います。学会は新体制になり、また楽しく支援にかかわり続けることを応援できればと思います。

*

7月に中央法規さんから『ジェノグラムを活用した相談面接入門 家族の歴史と物語を対話で紡ぐ』（共著）を出版させていただきましたが、紀伊国屋電子書籍の医療系部門ランキング 1 位になったことを教えていただきました。多くの人に、自分の経験が役に立つのなら嬉しい限りです！

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P17～

篠原ユキオ



昨年大学からのミャンマー人の教員が発起人になって動き出した『1コマ漫画でミャンマーの人たちを支援する会』に協力している。その動きが本格的に知られるようになって先日朝日新聞の夕刊一面に作品とともに紹介された。夕刊とはいえ一面

ップに自分の漫画が載るといのは久しぶりである。

私が声をかけた仲間の漫画家の中にはすぐに反応して作品を送ってくれる人もいたが、政治的な発言は避けたいという人たちも多い。これはそれによって作家としての色付けがされることを危惧するためである。そういう世間の風潮は確かにあって悩ましい部分なのだが、ことミャンマーに関しては政治的というより『人道的』と言いたい。

誰が見ても問題だと思うことに漫画家としても発言しなければいけないと思う。

そういう意味では諷刺漫画家を名乗るバンクシーがアジアの出来事に何も発言しないのはおかしいと思っているのである。

HITOKOMART

P263~

サトウタツヤ

今回の原稿では、シンボリックリソース、という概念に触れた。最近亡くなった水島新司のマンガ『男どアホウ甲子園』と『タイガーマスク』だけではなく手塚治虫原作のマンガ『鉄腕アトム』も扱いたかったのだが、扱えなかった。鉄腕アトムにはロボット行動3原則が埋め込まれている。SF作家アイザック・アシモフが1950年に発表した名作『われはロボット』(I, Robot)の冒頭部分で、「人間に危害を加えてはならない」、「人間の命令に従わなければならない」、「自己を守らなければならない」というロボットの行動を支配する3原則を提示した。その当時『鉄腕アトム』に触発され科学者や技術者になった人々は少なくない。その人々には、アトムの振る舞いを通じてロボット3原則がしみこんでいると思われる。また、西洋では人に似たロボットを作るより機能を代替するロボットを作るのに対して、人の形に似たロボットをロボットの典型とする理由はアトムにあるかもしれない。総務省の平成27年版情報通信白書(特集テーマ「ICTの過去・現在・未来」)にも『鉄腕アトム』がロボットのイメージを決定づけた作品であるとして紹介されている。

https://www.soumu.go.jp/johotsu_sintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc254340.html

対人援助学&心理学の縦横無尽

P106~

鷓野祐介

本日(2月28日)、コロナ禍が始まって以来自粛していたフィールドワークに、岡山県井原市の高屋キリスト教会へ行ってきました。30年ほど前に何度か取材した「中国地方の子守唄」の元歌伝承者の方の息子さんとバツリお目にかかるという、「神さまのお導き」としか思えないような奇蹟的な出会いがあり、参会された皆さんと一緒に、平和への祈りの歌詞を含む讃美歌390番を歌いました。快晴の空にはヒバリのさえずりが響き渡り、ひととき長く厳しかったこの冬がようやく終わったことを告げているようでした。春の訪れを寿ぐと同時に、この澄み渡る空はウクライナにも続いていること、そしてその空の下で今起っている惨禍のことにも、想いを馳せないわけにはいきませんでした。主イエス・キリストの平和への祈りが、かの地にも満たされますように。

うたとかたりの対人援助学

P195~

中村 周平

寒暖差のせいなのか、二月に入ってから腰の調子が良くなく、原稿の執筆作業ができませんでした。体調を万全にし、次回しっかりとお届けできるようにしたいと思います。この度は大変失礼いたしました。

ノーサイド

休載

山下桂永子



この2年は宿泊を伴う遠出はできずじまいですが、以前はよく旅をしていました。海外のような長めの旅は年末や年度末に行くことが多かったのですが、今思えば、どうしてこんな忙しい時期に1週間も休みが取れたんだろう…。何事もやると決めてからやる方法を考えるタイプです。ただ

やると決めてからでも取り掛かるのは遅く、夏休みの宿題は8月31日にやるタイプですし、旅の荷物のパッキングも余裕で前日の晩に取り掛かるタイプです。

今回の内容は、実は1回目から書きたいことだったのに、気がつけば1年以上も取り掛かれなかったものです。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために

P181~

中島弘美

朝ドラを観ている。主人公が同世代の物語だ。テレビ画面に京都の嵐電や鴨川が映るのもうれしい。ある日は、子どもたちの野球のシーンだった。「私も子どものころ、堤防近くの公園でブランコやドッジボールに夢中になったなあ」数日後、再び、堤防のシーンが出てきた。どこで撮影をしているのか気になって調べてみると、なんと、幼いころ住んでいた近くの藻川の堤防であることがわかった。うわあ、あの堤防なの?と、確かめたくてアルバムを引っ張り出してきた。すると川沿いの写真には雑草や砂利が写っている。春は友達とつくしをさがして歩き、秋の運動会の頃は、徒競走の練習をした。懐かしい!

最近では、堤防というといネ科植物等の花粉の宝庫なので、できるだけ近寄らないようにしている。今年も花粉の季節がやってきた。この春は堤防にこれまでとは異なる思いが加わった。

カウンセリングのお作法

P34~

竹中 尚文

今回も「ホームレスの個人史」が書けなかった。コロナ禍が続く中、インタビューができない。インタビューのストックもなくなり、連載はお休み。何も書かないのも不本意なので、今回はむかしばなし。

路上生活者の個人史

P112~

寺田 弘志

年明け、接骨院に来てみたら、当て逃げされ、看板が壊れていました。新しい看板と交換する新しい看板と交換するとなる

と、30万円くらいかかってしまいます。

事故の再発防止のため、もっと高い位置で建物に直付けすることにしました。配線を移動する必要がありましたが、電気工事士の試験にも受かったので自分でできます。



シートの発注、取り外し、全体のさび落とし、取り付け台のペンキ塗り、配線移動、アクリル板カット、シートの貼り付け、本体の再度取り付け、蛍光灯の交換、シートを貼ったアクリル板の挿入、ふたと支持棒の固定といった工程でした。



作業にだいたい三日間かかりましたが、シートの印刷を良心的な印刷屋さん頼めたおかげで、費用はトータルで三万円以内に納まりました。プリントスタジオさん。超おすすです。

カラーでも料金は変わらないので、[当院](#) [ロゴ](#)を印刷してもらいました。

接骨院に心理学を入れてみた

P207~

山口洋典

年始に父を見送りました。1月3日、2年振りに一家そろって正月を迎えようと、

弟の家族らと実家で食事をしよう、というその日でした。朝食を終え、デザートのリングを食べる直前に呼吸困難となり、救急搬送された病院で死亡が確認となりました。病院到着後、1時間ほど心臓マッサージを続けていたようですが、窒息の原因については、心筋梗塞や脳梗塞が考えられるものの、病理解剖をしなければわからない、とのことでした。

2018年の8月に脊柱管狭窄症の手術をして以来、入退院を繰り返す生活が続いてきたものの、あまりに突然の別れとなり、特に「私をもっと気を向けていれば」と自責の念に駆られていた母をなだめる日々がしばらく続きました。

かつて大阪・天王寺の浄土宗應典院に勤めていた私は、いわゆるグリーンサポートの大切さを語ってはきたものの、いざ当事者の立場となるとままたまらないことも多いことを痛感する日々です。年々弱くなる身体に向き合ってきた父が、75歳を超えて最初の運転免許証の更新時に求められる認知機能検査を経た高齢者講習に合格するように、昨年の8月から歩行器を使って積極的に外出するようになっていたということは、今回の久々の帰省で知りました。

無事に四十九日の法要を終え、徐々に見送りから供養のときへと時が流れている中、改めて丁寧な生き方・働き方を重ねて暮らしていくことへの誓いと、多くのご縁のおかげで父が充実した人生を送ることができたことについての謝意を、ここに記させていただきます。

PBLの風と土

P201~

見野 大介

案の定、正月休みは元旦のみになり、ここまで無休での制作三昧。

五月中には奈良県川西町へ引っ越しするが、それまで休暇は無さそう。…ブラック企業ですなあ(笑)

ハチドリ器

P4

浦田雅夫

コロナになりオンラインシステムを活用した学会や催しが当たり前になってきた。それはそれで便利なのですが、集い語り、

終わってから飲みに行くということもなくなりました。

いまをいきる子どもや若者はさらにコロナによって奪われたものが大きいと思います。まして、戦争などしてる場合ではないのです。

社会的養護の新展開

P81~

小池英梨子

隣の家のおじいちゃんが亡くなって、おじいちゃんの飼い犬のお世話を引き継いだ。毎日猫とばかり触れ合っているけれど、久々に犬と一緒に走ったり散歩したりするととっても楽しい。笑顔が眩しい。



そうだ、猫に聞いてみよう

P185~

天川 浩

お久しぶりです(まず、私のことを覚えている人がいるのか?)前号は、休稿させていただきましました。私事ながら、二年ぶりに、福祉の現場で働かせて頂いています。やはり利用者の方と、一緒に働くのは日々新鮮で新しい発見があります。そして、自分は、障害者福祉のお仕事が好きなのだなあ、と改めて実感しました。世の中、なかなか好きなことを仕事にできる人はいないと聞きますので、自分はとても幸せな人間なのだと思います。連載の方なのですが、唐突に新しい章に入りました。長年、連載している方々を尊敬します。私には、あんなにスムーズな展開を作れないからです。デヴィッド・リンチの映画が好きなのですが、彼の映画もぶつ切りになっていたり、全く脈絡のない展開になったりしますが、それを私もやらなくても良いのにな、と自分で自分に突っ込んでいます。次第ですが、みなさん花粉症どうですか?いいお薬、あったら教えてください。よろしくお

願いたします。

ブルーグレーの肖像

P223~

中條與子

ご無沙汰をしています。中條與子です。今号も『『盲ろう者』として自分らしく生きる』の執筆を、お休みをさせて下さい。

新型肺炎からお互いの命を守るためのマスクの存在は、わたしにとって移動時もコミュニケーション時も、影響を大きく受けていることには変わりはないけれど、マスクをしながらコミュニケーションをすること、移動をすることは、少し慣れてきた気がします。



特に人との音声によるコミュニケーションについては、(1)オンラインのツール(ZOOM 等)を使うこと、(2)電話機を使うこと、(3)スピーカーアンプのマイクを利用して喋っていただき、私がスピーカーの側で聞くということをする、相手がマスクであっても、音声の言葉が聞こえやすい事が多いと感じているところです。リアルで顔を合わせた対面コミュニケーション、一対一の場合であっても、(1)マイクを使っても大丈夫な部屋で、スピーカーアンプとマイクを利用してコミュニケーションをすること、または(2)電話機が二つある部屋のなかで、受話器からの音声を通してコミュニケーションをお願いすると、マスクをされていても、音声会話ができる事が多いです。

最近、ある方とスピーカーアンプとマイク的环境下で会話をした時、わたしに対して、「いま喋っているみたいに、メールではなくて、声を出して会話をしたらいいと思いますよ」という内容の言葉を、方言でいただきました。

わたしがメールでの連絡が多いためだと思うのですが、メールの内容を音声で伝えるだけで、相手の受け取り方が違うと思うと、仰っていただきました。

たしかに、音声で仰っていただいた言葉

を、メールでも同じような受け取り方ができるかと思うと、音声会話とメールのテキストとの印象の違いを感じました。相手の一語を聞き取るごとに、わたし自身は笑ったり、うなずいたり、考えたりすると同時に、相手にもわたしの反応が何かしら伝わっているのを感じます。また、方言で伝えられると、こころの鎧がとけ始めた気がしました。わたし自身はメールのテキストでのコミュニケーションの難しさを感じていたので、音声会話の力を体感する機会となりました。

すぐに音声で伝える機会が訪れて、相手の顔を見て音声で伝えること、また、メールで連絡をした場合も、電話や相手のところへ行って、メールを送った旨だけで伝えることを始めました。

心なしか、メールより言葉が少なくても伝わっている手応えを感じると同時に、わたし自身が、メールでは感じなかった、テキストでは感じない、顔の表情や音声の音量などから受け取ることがある感じました。聞き取る事ができない時は、途中から電話やメールに手段を変えました。

盲ろう者のわたしのまま、マスクをしたままでも成り立つ音声会話、良いコミュニケーション方法を編み出していきたいですし、言語化もしていきたいと思います。これからもどうぞ宜しくお願いいたします。

荒木晃子

2018 年秋にスタートした研究プログラムが、来月 3 月末をもって終了する。

今月 2 月 19 日(土)には、研究成果報告会を兼ねた公開シンポジウムを無事開催。今後は研究コアメンバー 11 名の研究成果を論述した出版物の刊行と研究成果の報告書作成を残すのみとなった。シンポジウムの告知は対人援助学会 ML にも UP して頂き、おかげさまで 270 名の参加申し込みをいただいた。ご参加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に心からお礼申し上げます。

直前に全面オンライン形式へ変更となりその対応も大変だったが、振り返れば、この大変さは 3 年半の研究期間を通し変わることがなかったように思う。大阪の豊中市から奈良県への転居は 2 年と少し前。引っ越し直後、研究調査のため台湾へ渡航。そうそう、引っ越しの半月前には、フラ

ンスから研究者ご一行をお迎えし研究会を開催したつげ。帰国した 2 か月後の春以降、コロナ感染拡大により 12 年毎月定期便で通っていた島根県の生殖医療クリニックのカウンセリング業務がオンライン対応になった。かわいいスタッフたちには直接会えないし、10 年以上毎月通っているクライアントさんとも、まだ PC 画面での面談が続き寂しい限りである。コロナ感染は、不妊治療に通院する患者さんたちを直撃し、クリニックのスタッフたちもその対応に追われているらしい。松江 WS の再開も見通しが立たない。

でも、どんな年も、何があっても春は必ずやってくる。もう、目と鼻の先だ。来月 3 月 13 日に自宅近くの奈良県広陵町で始まる家族理解 WS も楽しみだ。そうだ、引っ越しの段ボールの整理はこの 4 月から始めよう。新年を迎える気分で、新たな気持ちで。

今回は、まだ怒涛の日々を送っているため休載です。次回合流させてくださいませ。かしこ。

朴 希沙

前回から重い腰をあげようやく始めた「コミュニティが育つ、子どもがいる暮らし」ですが、1 回目を書いたばかりなのに…お恥ずかしいながら執筆を断念することとしました。

と、いいますのもこの 2 月に第二子を出産予定なのですが 2 人育てるのになかなか労力が取られてしまいそう。色々な制約がある中で対人援助学マガジンの執筆を続けるのは残念ながら今難しいねという結論に至ってしまいました。自分の思った通りにいかないのが子育てや家族とのつきあいですが、今回はこれで断念してもまたいつかどこかで形を変えて発信できる機会があればと思っています。

対人援助学マガジンにはマイクロアグレッションのことを書き始めてから長い間お世話になりました。思わぬところで思わぬ方が読んでくれていて、マガジンを読んでもの取材依頼や声をかけてくださる方もいたり。また他の方の記事も毎回面白く読ませてもらっていました。これからも一読者として楽しみにしています。ありがとうございます。